

第十三章 勇者たち

あるとき米国の法廷で、マルコスが大統領だった二十一年間に、多量の金が積荷としてフィリピンから出ていったことが判明した。その金は中央銀行で作られたのも、バンゲット社のような鉱業所で作られたのもなかった。残った謎は、それがどこへ行ったのか？

たしかに、マルコスはマニラでロバート・カーティスから盗んだ機材を使いジョンソン・マセイ・ケミカル社で再精錬した後、こっそりと船で運びだした。金はマニラを出る前に、ジョンソン・マセイ銀行で新しい紙で包みなおされ、それからチューリッヒ、ロンドンの金取引所から買い手に運ばれた。

他の闇の金塊はサウジの王子や中東シンジケート、またはルクセンブルクやリヒテンシュタインを通してヨットパの用意周到なグループに内密に販売された。

物資運送状を含む書類によると、いくつかの荷物は商業船や飛行機に乗せられてアメリカへ行ったことが分かる。一方、残りはCIAの飛行機で香港やオーストラリアの米軍基地へ向かった。金はフォート・ノックスで行き着いたわけではなく、びっくりするほど遠いアメリカへ運ばれた。たとえ、金がそこで行き着いたとしても、アメリカ政府はそのことを認めていない。それなら、金塊はどこへ行ったのか？

CIAや国防総省以外に誰がマルコスを保護し助けていたのだ？

発見された略奪品から利益を得ていたのは誰だ？

個人の懐にこの金塊のいくらかを入れるため連邦政府の影響力が使われたのだろうか？

答えはこうだ。マルコスはCIAを飛び越えて、「エンタープライ

ズ」と呼ばれる闇の組織と関係を持っていた。その組織は民間の諜報機関（PIO）と民間の軍事会社（PMF）の一団である。これらの組織はCIAや国防総省の元職員で構成され、彼らは自分たちのことを、冷戦の勇者たちと見なしていた。多くのPIOやPMFはCIAの大改革がすすんだ一九七〇年代に活動を開始した。彼らはジミー・カーターがCIAをかき回した後の一九八〇年代に急速に発展し、やる気十分なメンバーは、別の場所で仕事を続けることになった。

一九七二年の終わり、ジェイムズ・シュレジンジャーは、リチャード・ヘルムズに代ってCIA長官に就任した。彼は、もう役に立たない連中や、ヘルムズの下で暗殺も含め、アメリカの法を侵す活動に長期間従事してきた不正工作一派、数百人の工作員を強制的に退職させる意向をはっきり示した。CIAがウォーターゲート侵入事件や他の国内の侵入事件に絡んでいることが知られるようになった時、シュレジンジャーは内部調査と、政府に迷惑をかけるかも知れないCIAに関わる全ての諜報計画の完全なリストを作成するよう命じた。結果的に六九三頁の「家族の宝石」という報告書となったが、マングース作戦のような暗殺計画、フェニックス作戦における殺人部隊、国家安全保障のために隠された汚い仕事についての情報などが漏洩することになった。そして百人以上のCIA職員が首になるか早期退職を余儀なくされた。

フォード大統領はニクソンが辞任してから、CIAの悪事を調査するためにロックフェラー委員会を設置したが、米国やトルーマン以後の各大統領の名前を傷つけそうな「事実を明らかにしないよう強硬な保守派を配置した。

フェニックス作戦、ロッキード賄賂スキャンダル、その後のイラン・コントラ事件に関する議会聴聞会が開かれ、CIAと国防総省に対する追加的な肅清が行われることになった。

こうした追加に加えて、中国との和解についてCIA職員のリイ・クラインとニクソン大統領の間に、ジミー・カーターに対するジョン・シンググローブ少将やジョージ・キーガン空軍司令官のような軍トップとの間に生じたのと同じような争いがあった。カーターが大変多くの職業軍人やスパイを排除した時、彼らが個人生活を楽しめるために何をやるべきかということまで充分考えたようには思えない。どんなローマ皇帝でも軍団を解散するときにそれほど不注意であったことはなかったであろう。

賢明で攻撃的な男たちが、バーチ・ソサエティやムーニズ、世界反共連盟、金持ちの保守派の大物などから資金援助を受けてこっそりと再結集した。

サンテューの「アンブレラ組織」のように、「エンタープライズ」は一九八〇年代の後半にパワーのある影響力のある組織に成長した。

彼らはすでに民間の市民であったが、こうした男たちは、軍当局者やCIAや国軍の長にたいして緊密なつながりを持ち続けた。こうした二重構造のため、公的なアメリカ政府の活動と秘密の目的を持った活動を厳密に区別することは、殆ど不可能である。このことは、これらの個々人の多くが、秘密の活動、詐欺、公共サービスや秘密基金の使用に長年従事してきたため、本当に分からなかったのだ。

エンタープライズのメンバーは、民間企業の合法的な会社の姿であるが、実際は情報機関のための、もっと言えば軍部のための「トロイの木馬」の役割を果たすCIAの秘密企業と仕事をすることに慣

れていた。事実、PMFのいくつかは、軍司令官や提督や元スパイが政府業務から離れていないかのごとく、給料や年金を引き出し続けることが出来るように作られたみせかけにすぎなかった。多くのCIA職員は各種のごまかしの下で、数年いや数十年過ぎてきたので、彼らがすでにCIAを辞めたのか単に地下に潜ったのかを、何の疑いもなく確定することは難しかった。

ひとつの完璧な例は、ウイリアム・キャセイである。

キャセイはOSSのオリジナルメンバーの一人である。彼は法科学校を終了後、会計会社で働き、同僚の弁護士であるジョン・ポップ・ハウレイと関係を維持した。ジョンはワイルド・ビル・ドノバン法律事務所、ドノバン・レジャー・ニュートン・アンド・アービンで働いていた。ドノバンがOSSの長官に就任したとき、キャセイとハウレイは彼の組織、OSSに参加した。キャセイは戦時中のジョン・シンググローブ事件の担当官だった。

一方、ポール・ヘリウエルはシンググローブの直接の上司である。キャセイはまたアレン・ダレスやジョン・フォスター・ダレスの親密な友人であり、レイ・クラインと共に働き、小島少佐に対するサンタ・ロマーナの拷問が成果をあげたころ、ランズデールに関係するようになった。このため、キャセイはブラック・イーグルについて多くを知る地位についた。ある情報筋は、キャセイは財務知識があるため、ロバート・B・アンダーソンやジョン・L・マツコイの指導のもとにブラック・イーグル・信託を開始するとき、ポール・ヘリウエルやエドウィン・ポレイイと同じように重要人物の一人となった。

戦後、キャセイと友人ハウエルは、彼らのウォール・ストリート法

律事務所を設立した。しかし、キャセイを本当に金持ちにしたのは、一九五四年のメディア所有会社キャピタル・シティズを立ち上げる

とき、別の元諜報担当者と関係を持ったことにある。多くの調査によれば、この時期、CIAは放送や出版における秘密の活動のためのみせかけ会社を設立するため、数百万ドルを注ぎ込んだし、キャセイは破綻したメディア会社を獲得し、赤字決算から抜け出すためキャピタル・シティズにこれらの資金のいくばくを注ぎ込んだといわれている。キャセイは決してCIAを去ったのではなく、ただ金融を扱う蝶々に生まれ変わったただけだった。

上級のCIA工作員がウォール・ストリートで二重の仕事をしたのは初めてではなく、アレン・ダレスは同じことをやった多くの中の一人にすぎなかった。

一九七一年から七三年の間に、キャセイは証券取引委員会(SEC)の委員長としてニクソンに任命され、そこでSECの弁護士スタンリー・スポーキンと緊密に仕事をした。(スポーキンは後にキャセイにCIAの総合弁護士として指名され、Schlitz事件に関与することになる)。キャセイはニクソン政権の経済担当次官として、また輸出入銀行の会長として仕えた。一九七八年、キャセイはマンハッタン研究所というシンクタンクを設立したが、そこは多くの元CIA職員を抱え、保守派の基金から保守派の作家まで回り、かき集めた金を注ぎ込んだ。キャセイがキャピタル・シティズを去り、レーガンの大統領の選挙参謀となり、その後レーガン政権のCIA長官になった時、キャピタル・シティズの株を七百万ドルも所有する最大の株主であったといわれている。彼はずっと大株主であったし、CIAの長官であった一九八五年、キャピタル・シティズはABCを買収している。

自らの全職歴が不正の金融活動に巻き込まれた一人の男、キャセイは本書に登場する多くの主要人物と関係をもった。彼のDNAはサンテイーに会う前からマルコスが終わるまで、あらゆる場所に存在している。彼はCIAの民営化を夢見た男の一人で、CIA長官としてレーガン大統領にその方法を示した。

レーガンの最初の行動は、大統領行政命令12333号に署名することだった。この命令は、CIAや他の政府機関がPMFと契約をすることを公認し、「公認された諜報目的のための契約や調停は、財政支援を明かす必要がない」ことを公認するものだった。このことでキャセイはクライン、シンググローブ、シャックレー、ランズデール、他の多くの追放された者たちとの仕事にもどることになった。そして、彼らの活動をあいまいにしながら、彼らを、少なくとも論理的には秘密の領域の人間にしていた。同時にキャセイは、個人的にマルコス大統領を丸め込む仕事を引き継ぎ、闇の金塊を提供するような圧力をかけ、最終的にはマルコスの失脚と追放、そしてマルコスの金塊を陰で操った。

結局のところ、イラン・コントラ事件ではエンタープライズのメンバーと、選挙で選ばれたわけではない国家安全保障会議、国防総省やCIAの職員との間で親密な契約があったことを明らかにしている。そうした二重構造は政府にとっては、例えばランズデールがマフィアに対してフィデル・カストロの暗殺を依頼するような時に役に立つのである。

PMFを使い、よその国で暗殺部隊を訓練させることは、ホワイト

ハウスが暗殺を含む秘密の海外での政治目的を実行することを可能にした。また米国とは戦争状態にない国で、代理軍事活動も可能になったのである。それは対外政策の汚い部分を実行するために、外科手術用手袋やコンドームをつけて、指紋もDNAも残さないようなものである。役人が委託殺人をうまくやってしまうことが許されるだろうか？これは、連続殺人の常習化につながるのではないか？これまで、驚くほど多くの元帥、海軍大将が、国家安全保障会議の高級職員がフィリピンでの財宝探しと、マニラからの秘密の金の運搬に関与した。この場合の二重構造は海外での政治目的を有利にすることと、秘密な意図が明らかでない極右の私的軍事組織を豊かにし、資金援助をすること両方に使われたのだろう。

ランズデル、レイ・クライン、そしてジョン・シングロープのようなエンタープライズの中で良く知られた人物の幾人かは、第二次世界大戦中にOSSで仕事を開始し、トルーマンやアイゼンハワー政府の時代に急速に出世をしたのだ。

当時、ナチや日本軍の金は不法活動を立ち上げるために、M資金のように使われた。

「冷戦主義者」としての彼らの政治観は、蒋介石總統を救出しようとした時に、イランでシャーに権力を持たせた時、スカルノやカストロを排除しようとした時、チリのアジェンデ政権を転覆させる動きを助けた時、カンボジアやラオス、ベトナムで不都合な市民を処分する自由をもっていた時などに形成された。

ランズデルは、まだ現役の提督であったが、カストロを殺す活動であるマンゲース作戦を指揮した。ランズデルはケネディ大統領領により引退を余儀なくされた時、かれは簡単に野にくんだり、エンタープライズの設立委員となって、一九八七年に死ぬまでその中心人物であった。

フェニックス作戦は一九六九年から一九七二年までサイゴンのCIA局長で、後に作戦担当のCIA副長官になった、テッド・シャクリーに監督されていた。ある情報筋によると、シングロープは軍事面でフェニックス作戦に関与していたと主張しているが、本人は強く否定している。彼は確かに、シャクリーを含む作戦に関与した多くの人間に近いところにいた。ウィリアム・コルビーは上院聴聞会で、フェニックス作戦では、共産主義者と疑われた二万人以上のベトナム市民（男・女・子供）を殺したと述べた。別の人間は合計を七万人以上と言っている。

議会聴聞会は、フェニックス作戦は総じて非合法活動であると宣言した。それでも、フェニックス作戦は一九七五年に米軍がサイゴンから撤退するまで、議会の方針に従わないで続けられた。

「フェニックス作戦は退役軍人ネットワークの創造だった。」と作戦の担当であったスタン・フルチャーは言っている。

「最高レベルの男たちのグループ、つまりコルビーとそうした連中は自分たちのことをアラビアのロレンスと考えていた。」

同様の古い仲間がエル・サルバドルにいて、この時は、レイ・クラインは特別戦争学校で訓練された台湾の将校を含む代理軍を使っていた。ジャーナリスト、ダグラス・バレンタインは次のように説明する。「フェニックス作戦の全員が一般的に持っていたのは、強圧的な政府やコントラのような反乱グループに武器や補給品を売って、彼らが反テロリズムから利益を得ていた。それらの名残が第三世界中の焼き尽くされた灰のあとなのだ。」

シングロープとシャクリーは後にCIAを去り、エンタープライズの組織と緊密に一体化した。シングロープは公表されている一九七八年のカーター大統領との争いの後、野に下った。シャクリーはカ

ター政権のCIA長官、スタンスフィールド・ターナーとのケンカの翌年に野に下った。シングロップとランズデールはその時、ウイリアム・キャセイに率いられ、レーガンの選挙運動に参加した。

シユレシンジャーによる「家族の宝石」関連の追放と、それに続くカーター大統領による人事面の粛清という組み合わせの影響は、そのために思わぬ面倒を招いた。それは極右を地下活動や民間企業に追いやり、そこではチェック無しにかなりの程度まで活動が出来たし、政府の秘密の資産を自由に使い続けられたという意味においてである。もし「エンタープライズ」が空軍機、海軍艦、Seals（海軍特殊部隊）、特別作戦部隊を使うことを望んだら、それらが誰に気付かれることもなく、注文通りに準備される方法があったのだ。

ニューヨークタイムスのジャーナリスト、セス・ミダンスは信頼できる情報として「シングロップはフィリピンに入ったり出たりしている、彼は、我々に知られないでクラーク基地に着陸することさえ出来るのだ」と紹介している。

我々は、特殊部隊の高官が、シングロップやクラインなどに関係するPMFのグループと一緒に、フィリピン財宝狩りに参加するため短い休暇を取ったことを確認している。このことは政府サービスと個人の利益との重大な区分をなくすもので、倫理規範の実践を求めることが出来なくなってしまう。

監視されないと常習的になるものだ。レーガン大統領、ブッシュ大統領のもとで、PEIOやPMFは増殖し、ホワイトハウスの事実上、「秘密の拡大組織」となった。今日まで、エンタープライズのリーダーやPMFの支持者達は、ホワイトハウスは事業家に転じた情報員によって運営される私的非法組織を必要としていると主張して

いる。それゆえに、PMFは少し名前を挙げるだけでも、南アメリカ、アンゴラ、コロンビア、クロアチア、エリトリア、エチオピア、シエラレオネの紛争に関与した。ホワイトハウスに雇われたわけではなく、彼らは政治体制への契約のもとで仕事をしたが、彼らの人権の扱いたるやひどいものだ。ビネル社はディック・チェニーのハリバートンが率いるPMFの子会社で、ミャンマーの軍事独裁政権と仕事をした時は、地球上で最悪の人権の扱いだった。

彼らの目的のいくつかは合憲性の面で問題がある。エンタープライズ組織のメンバーからの手紙を再現してみよう、そこには彼らが秘密のFBIスタイルの保安部隊を立ち上げアメリカ国民や「彼らの支配化にある」別の産軍複合体を守るため、発見された日本軍の戦争略奪品をいかに利用しようとしたかが書いてある。

これはお金のかかることである。ムーニーズやバーチャーズのようなグループ、そして裕福な個人は必要とされる金額の一部だけしか提供しなかった。ひとつのはっきりした解決がサンタ・ロマーナに管理されて遊んでいる口座のような現存のブラック・イーグル基金を流用することだった。これがサンティーが一九七三年にワシントンへ連れて行かれ、彼が所有する基金を譲り渡すよう圧力をかけられた理由である。

翌年サンティーが死んだ時、彼の所有するシティバンクとUBSにあるいくつかの莫大な金額の口座が速やかにランズデールの管理下に入った理由を説明している。それがどのように使われたかは知られていない。

マルコスが一九七〇年代に第2期の探索活動を始め、闇の金を売り

さばくための援助を必要とした時、マルコスとエンタープライズは共通の目標を持った。なぜなら、エンタープライズのメンバーはCIAの飛行機、米空軍機、米海軍艦の使用することができたのである。スービック湾やクラーク空港からマルコスの金が出発した時、こうしたことがアメリカ政府により公式に行われたのかエンタープライズによって秘密に行われたのかはなんととも言えない。十四章ではこの二重構造が示す数々のエピソードをお見せしよう。

次第にマルコスは自分が発見した金の管理、支払い、管理について、レーガンのアメリカ政府と主導権争いをしていることに気がついた。彼はアメリカ政府を出し抜くためにあらゆる策略を用いた。これが彼の失脚につながることになる。

国際金融当局は、中央銀行が直接民間から金を購入できるように決定した時、マルコスはフィリピンで採掘したすべての金が中央銀行に直接販売しなければならぬと布告した。これでマルコスは自分の金のいくらかを売れるようになったし、銀行はその時から、苦勞なしに金を海外へ移動することができるようになった。

一九八一年の十一月、フィリピン政府は今回の布告のせいで国際マーケットにおいて、「金保有以来の局所的な過剰」をもたらすだろうと声明した。

三ヶ月以上にわたって、約三十万オンスの金が香港、ニューヨーク、ロンドンそしてチューリッヒに船で運ばれた。その金はフィリピン政府の金として印がつけられていたが、関与した商業銀行はその金での支払いを許されたが、そのことは金が短期間のうちに取引されたことを意味している。この特権のために、銀行は1%の手数料を支払いそれはマルコスのもとに流れた。

フィリピン人の元外交官によると、フェルディナンドの自家用機は

スイスまで何回も往復をした。民間機もまた使用され、それは貨物運送状によって証明されている。十二回の極秘輸送がKLM、PAL、エアフランス、サベナ機で行われたと言われている。たとえば、一九八三年九月には、KLM機のマニラ・チューリッヒ間のフライトで金塊七トンが運ばれている。同時期に別の1.5トンの金塊がロンドンまで運ばれている。その間に、CIAのパイロットと国防総省の貨物飛行機は定期的にマルコスの金をオーストラリアと香港に空輸した。

CIAがマルコスの金塊を物理的に移動している間、マルコスはアメリカに財産を貯め込むよう仕向けられた。このことは、一九八三年から一九八五年のロナルド・リウオルドのホルル詐欺裁判で明らかになり、マルコスの投資財閥会社であるビショップ、ボルドウィン、リウオルド、デリンハム&ウオンがCIA資金のための一般的なルートだったことを明らかにした。

その財閥会社はマルコスや他の裕福なフィリピン人がアメリカで不正の金を投資するのを助けた。イメルダダが後にニューヨークで強請の罪で裁判にかけられた時、彼女の弁護士はイメルダダと夫マルコスはホワイトハウスの友人からそうするよう働きかけられたのだと述べた。

ホルルでの裁判証言によれば、フィリピンの億万長者、マルコス一家の友人であるエンリケ・ゾベルの援助によって、秘密ルートがリウオルドによってつくられた。

リウオルドは、ハワイでポロクラブを経営し、ゾベルは世界一流のプレイヤーだった。リウオルドは、ゾベルは自分同様CIAの協力者だと証言した。アヤラ・ハワイのような共同事業を通して、彼ら

とCIAは、アメリカへ現金を持ち出した外国の上級外交官やビジネスマンの金を保護し、いざと言う時にアメリカで役に立てるのだ。

ゾベルとの関係は、当時、ジョー・マクミキング大将が、小島少佐を拷問したG2のサンタ・ロマーナとランズデル大佐の直属の上官だった一九四五年までさかのぼる。その後、金をたっぷり持って、マクミキングはドン・エンリケの叔母、メルセデスと結婚し、ゾベル・アヤラ一族が世界的な金持ちになるのを手伝った。この秘密を漏らさない境遇の中で、エンリケ・ゾベルはひとかどの裏切り者である。UCLAでの勉強した後で、マニラの上流マカティ金融社交界を發展させて名前をあげた。

彼のマルコスファミリーとの関係は複雑で変わりやすいものだった。一九八〇年代のはじめには、大統領の後継者の可能性もあると言われるほどだった。マルコスの旧友エドアルド・コンジャンコはサンミゲル社、つまりサンミゲルビールの醸造会社で、アヤラ・コーポレーションの重要な所有会社のひとつを攻撃的にのつとろうととりかかった時、マルコスファミリーはドン・エンリケがごく簡単に屈服すると考えた。このことはおぼのメルセデスとおじのジョーを大変不愉快にさせたので、彼らはゾベルからアヤラ社の支配権を奪い彼の最初のいとこにそれを譲った。ドン・エンリケはその後、独自の道歩んだ。

ゾベルは戦争略奪品を発見しようとするマルコスの骨折りの多くを知っていた。一九七五年にレーバーグループの使節ミュータックはゾベルに、ゾベルがベニンシユラホテルを建築中のネルソン飛行場の管制塔の下にゴールドデン・リリー地下金庫室があると通告した。

一九七五年六月三日、ミュータックは書いている。「私たちは、古い管制塔の内外の敷地に、少なくとも数億ドルの膨大な量の宝石や金

塊から成る財宝の収集品が埋蔵されていることを証明する重要な地図と目撃者を抱えるグループと一緒にいる。我々は前述の敷地が明け渡された事は知っている。そして、ある建築工事が当該の敷地で完了したかも知れないと危惧している。その場でやると計画したどのようなプランも私たちが財宝収集品を探し出し取り戻すまでは待たなければならない」と。

一九八三年、ゾベルはスポーツ花形選手のグレゴリー・アラネタと結婚するイレーネ・マルコスの贅沢な結婚式の後援者だった。グレゴリーはランズデル配下のトップの殺し屋、ナポレオン・バレリアーノの継子だった。イメルダはその結婚式に二千万ドル使ったと言われている。オーストリアのカート・ワルトハイムから贈られた銀の馬車は、モロッコのハッサン王から贈られた七頭のアラブ種の馬に引かれた。お返しにマルコスはオーストリアとモロッコの銀行に多額の金を預けた。(この金の証拠は二〇〇一年に表ざたになったが、それはドイツ政府がイレーヌとその夫をスイスの銀行からドイツの銀行へおよそ一三四億ドルを不正に移そうとしたとして告発したときだった。)

このように金をみせびらかすのはマルコス家の習性のようなものだ。マルコスはアヤラ基金のような慈善信託を立ち上げられたはずだったが、イルコス・ノルテの邸宅に隠居できたはずだった。

アンドリュウ・カーネギーはかつて、金持ちで死ぬ奴は馬鹿で死ぬ。といったことがある。マルコスには慈善に費やす時間がなかった。なぜならレーガン政権から米国の対外政策の目的のために、もつと多くの間の金を出すよう頻りに圧力を受けていたからだ。

マルコスファミリーの情報筋によれば、ピル・キャセイはフェルディナンドに、もしお前がCIA指定の銀行に間の金を預けることに同意するなら、アメリカ政府は永遠に権力の座を維持させるだろう

と言った。」ということだ。

結果として生じたひとつの取引がいわゆる「中国指令」である。マルコスファミリーの情報筋によれば、一九七二年、ニクソン大統領とヘンリー・キッシンジャーは周恩来首相と秘密の取引をした。それはマルコスが差し出した多量の金と引き換えに、中国が台湾に関して米国との争いを避ける取引だったと主張している。我々はその政治的詳細を確認できないでいた。しかしながら、長年にわたって明るみにでた銀行の書類は、はっきりと多量の金塊がこの時期に中国本土の銀行へ移されたことを示している。

そしてサンタ・ロマーナ、フェルディナンド、イメルダ・マルコス、一族のメンバー、そして裕福な仲間はその銀行の金塊口座をもっていた。こうした連中はみんな徹底した反共主義者で、彼らが冷戦のさなかに中国の銀行へ金塊を移すもつともな理由などないのだ。そうした理由だけでも、この話は十分に真実味がある。

この情報筋によれば、一九七一年から一九七二年にかけて人民共和国の経済はかなりひどい状況で、外貨準備高は底をつき、世界規模の石油危機と国内の飢饉でさらに悪化していた。そのすべては正しい情報である。共産党政治局へかかる圧力で、党のタカ派は発言力を増し、台湾の資産の支配力を得るため台湾侵攻を主張した。

CIAと国防総省のアナリストは、中国は今にも台湾侵攻を始めそうだが、しかしアメリカはベトナム対策で手いっぱいだと結論を出した。この状況は核戦争につながりかねなかった。ひとつの方法が緊張を和らげるために見出される必要があった。CIAのアナリストが提案した新しい解決策は、マルコスから得た間の金を多量に投入し、中国が自国経済を安定化させるのを助け、戦争の圧力を減じ

るというものだった。もしアメリカが中国を国内危機から救えば、フィリピンにも利益をもたらす平和の一時代を招来させることが出来る。

我々の情報筋が言うように、ニクソンとキッシンジャーは秘密裏に、マルコスが中国へ金塊で六百八十億ドル（マルコスが持つと彼らが知った量）を提供し、五、六年の間に多くの薄片の形でPRC銀行（中国国営銀行）に移すように依頼した。これは即金の贈り物ではなかったようだ。贈り物は追加的に香港や中国大都市のいろいろなPRC銀行に預金され、金塊は銀行に資産担保として残り、事前に協議したいろいろな目的のために割り当てられたのだろう。中国銀行は強化され、中国経済は安定化し、共産党政治局の穏健派は勢力を回復し、台湾侵攻を主張したタカ派は沈黙をさせただろう。米国基金はひとつも関与していない。

「それはマルコスが発見した日本軍の戦争略奪品のなかで、よい使われ方をした唯一のものだ。」と我々の情報筋は言った。

周恩来はきわめて現実主義者で、その作戦を徹底して推進したと伝えられている。マルコスが協力したことは重大で、彼はアメリカ政府から十分に支援を受けただろうし、多くの形で報われただろう。アメリカ政府はマルコスに、彼とイメルダは北京を公式訪問ができ、それが世界中に彼らの名声を高めることになる保証し、取引を気に入るようにしたのだ。加えて、中国はフィリピンに対して農作物援助を実施してお返しをしたはずだ。

一九七四年、イメルダと息子のボン・ボンは北京を公式訪問した。彼らはびっくりした表情のひ弱な毛沢東を間に挟んで、のぼせて笑

いながら写真を撮った、毛沢東が写っている写真の中で最も奇妙な一枚である。フェルディナンドは翌年北京を訪れたが、あけすけにものを言う冷戦主義者としてかれの行動は奇妙なものであった。予定外の余禄として、イメルダの兄弟コケイ・ロムアルデスは自分の知性以上の忠誠心を述べたおかげでフィリピンの中国大使となった。

我々のマルコス情報筋によれば、中国指令はニクソンの歴史的中國訪問と、中国政府との外交関係設立の基盤であったと主張している。

資料によれば、中国指令は一九七二年に始まり、長年にわたって続き、マルコスの金塊は *Po Sang* 銀行と香港の中国銀行、シアメンにある他の中国系銀行を含む中国政府所有の銀行に移されたことを示している。こうした銀行からの書類は、サンタ・ロマーナ、フェルディナンド・マルコス、イメルダ・マルコス、他の大変大きな口座の存在したことを示している。われわれのCDにはコピーした関係書類の中に、金仲買人が金の移転がうまく実行できた時に支払われるべき手数料を請求する手紙がいくつかある。マルコスファミリーと金持ちの友人たちは、その後にくわした口座を抱える中国銀行の新社屋落成式に参加するため、シアメンを旅行している。シアメンはアモイに隣接しており、フェルディナンド・マルコスの実父に長く関係のあった福建省グループの故郷なのだ。

二〇〇〇年には更なる証拠が出てきた。それはイメルダがこれらの金口座に近づくため銀行職員を買収し、中国人の女を雇った容疑で香港政府から告発された時である。一九九九年の十二月に、香港政府の検察官によれば、中国銀行、HSBCそしてシアメンのPR

C銀行の口座から二十五億ドルを取り戻すために、イメルダは賞金稼ぎに三十五%払うことに同意した。イメルダの弁護士は、彼女は貧しい人を助けるために金を工面しようとしただけと言った。その後、もうひとつ、秘密のマルコスの金塊口座がスイスのUSBにあるというニュースが流れた時、イメルダは驚くことではないわ、昔はお金を持っていたんだから」と嘆いた。

中国におけるこれらの金塊口座の存在が明らかにされた時、冷たい戦争がなお続いていた一九七〇年代のはじめ以来、どのようにして金塊口座が中国にもたらされたのか誰も関心を持たなかった。誰も、金塊口座がもたらされた理由とニクソンの一九七二年の北京への公式訪問とを結び付けなかった。

一九八〇年代のはじめに、もうひとつおかしな展開があった。フェルディナンドとイメルダは太平洋戦争後にゴールデン・リリー略奪品をもとに開設された特別の秘密口座の存在を知った。

これは、大阪の三和銀行の十億ドル金塊信託で、マツカーサー元帥と裕仁天皇の名前で開設されており、第九章で述べられた通りである。日本人はそれをマツカーサー基金と呼び、一方米国人はそれを裕仁の在位時代の名前を使って昭和信託と呼んだ。三和銀行は日本の古い銀行のひとつで、裕仁は第二次世界大戦前からかなりの量の株を所有していた。その信託はロバート・B・アンダーソンによって開設されたが、それは彼がマツカーサーやランズデルとゴールデン・リリーの財宝の所在地を回つてまもなくのことだと明らかになっている。マツカーサーの名前は信託に使われているが、少なくとも直接的にはマツカーサーに利益をもたらさよう意図していたとは言えない。

裕仁に関しては、ジャーナリストで米軍占領時代初期にSCAPの記録を読むことが出来たポール・マニングによると、天皇は戦前から海外に作った口座に金と通貨で秘密の十億ドルを所有していた。天皇は米軍占領中に海外投資からの利益で年に五千万ドルを引き出しており、SCAPの財務相談役はこれらの収入を生み出す資産に気づいていた。重要なことに、三和銀行はSCAPのマクアット將軍の経済科学局によって不問にされた三つの日本の銀行のひとつだった。他のふたつの銀行は東海銀行と第一勧業銀行で、田中クラブによってM資金からの引き出しが増加していることと関係していた。今日、三和銀行は「我々は世界で成功してきた。」というスローガンとともに世界規模の銀行活動を宣伝している。本當かい。

フェルディナンドとイメルダは、サンティの死後、その書類を整理するなかで、三和銀行にある昭和信託の存在を知った。我々がコピーした資料によると一九八一年までに昭和信託は四半期ごとに三億ドル以上の利益、または年に十億ドル以上の利益を生み出していた。銀行オーナーの一人、裕仁天皇は間違いなく有利な利率の権利を有していた。(これらを示す資料はマルコスが権力を剥ぎ取られ、フィリピン政府にマラカニアン宮殿が没収された後、マルコスの個人金庫で発見された。)

マルコス一族は、もし自分たちがうまくカードを使えば昭和信託を手に入れることが出来たと考えた。少なくとも、自分たちに利子支払い分のいくばくかを手に入れられたのにも思った。もし、合同信託のニュースが漏れ出たならば、いくつかの理由で日本政府やアメリカ政府にとつてかなり具合の悪いことになるであろう。

第一に、裕仁は大変貧しく、生計を維持するためには年俸二万二千ドルを与えねばならぬという見せ掛けを日本政府はなおも維持

していたし、第二に、日本自由民主党はその時、田中贈収賄を含むもうひとつの大きなスキャンダルにもがいていたのである。アメリカ政府にしても、日本はまったく無一文だと繰り返し宣言していたので、一九四五年以来の裕仁・マッカーサー合同信託の存在が開示されると、手の込んだやつかいな対策が必要になるであろう。

交渉人ナティビダッド・M・ファジャルドを含むマルコスチームは、昭和信託の三人の受託者(ひとりの日本人とふたりのアメリカ人)を含む日本政府役人と非公式の協議のために東京へ飛んだ。ファジャルドは数多くの金輸送でマルコスのために行動した仲買人だった。東京へのファジャルドの旅はロナルド・レーガン一期目の大統領就任の間に発生した。レーガンはマルコス家の重要な友人だった。レーガンと妻ナンシーは一九七〇年、マニラのイメルダ文化センターの開館式にニクソンの個人的代表として参加するため、初めてフィリピンへ行った。それがマルコスとレーガンが互いにたえあう長い友情の始まりだった。

ファジャルドとそのチームは東京に着いた時はじめて、彼らの東京訪問の真の目的を明らかにした。簡単に言うならば、マルコス家は、フィリピンのための財政支援策として偽装した膨大な支払いを受け取る代わりに、昭和信託について沈黙を守ることを申し出たのだ。彼らは信託からの四半期分の利息をマルコス家に譲るべきだと要求した。

これは強請のごときしるものだ。日本政府は大変驚いて、ファジャルドと彼の連れを武装警備のもとで日本滞在中、都ホテルの部屋にずっと隔離した。そのせいで、いつも彼らは自分の部屋で食事を取らねばならなかった。

ファジャルドが東京からイメルダに送った一九八一年二月二日

づけの手紙には、「日本のフィリピン向けの財政援助は、マッカーサーが皇室に対し、信託の形で残したドル基金（原文ママ）からの蓄積した利息収入で構成されます。．．．我々は日本大蔵省の許可のもとでいかにして金を香港へ持ち出すかの手段を考案し．．．フィリピンで大事業をなしている日本企業に対し融資されます。日本政府はその企業にカワサキがふさわしいと判断したことが明らかになるでしょう。皇族の手のもとにある信託金は、すでに大阪の三和銀行へ預金されており、香港への振替手配が整っています。これを実施するため、三〇年間、無利子でカワサキへ融資されることが明らかにされるでしょう。フィリピンのファーストレイのため的大型経済発展計画を財政支援する金を出すのはカワサキになるでしょう」と書かれている。

ファジャルドにより交渉された取引が行われたかどうかは分からない。しかし、銀行の書類によれば、今日でも三和銀行香港支店に多くのマルコス口座が存在している。

日本政府は多分アメリカ政府にこの脅しについて訴え、そのことが直後のマルコスの失脚につながったはずである。しかし、アメリカ政府が最終的にマルコスに見切りをつけた主要な理由は、レーガンによる『虹のドル』戦略の失敗にある。

レーガン大統領は政権のはじめに、一九七一年にニクソンにより廃止された金本位制にもどり、『虹のドル』と呼ばれる金本位の新しい通貨を導入すると宣言した。ニクソンの決断以来の一〇年間で、米国はひどいインフレーション、不況、そして高金利の時代を経験した。レーガンの対策は金本位制に戻ることであった。財務長官ドナルド・リーガンはこの政策が「途方もない好況」をもたらすだろうと言った。

大量のドル紙幣が世界に循環していたので、もしその紙幣が金に

兌換できるようになれば一九三三年以前の事態のように、アメリカ政府は金塊の需要に振り回されるはずだ。解決策は２段階方式だった。『虹のドル』は徐々に現行のドル紙幣と置き換えたとしても、一般大衆は『虹のドル』を金に換えることが出来なくする。『虹のドル』は中央銀行に保持されたときだけ、金に換えるというのが『虹のドル』の特別な解決策となるだろう。

この政策を実行するために、アメリカは、金価格を操作できるように足る大量な金の備蓄を必要とする。金価格があまりにも下落したなら、アメリカ政府は通貨価値を安定させるために金を買えばよい。もし金価格が高騰したなら、中央銀行は政府からの金塊を必要とし、政府は市場へ金塊を放出することで価格の高騰を抑制するだろう。これがレーガン政権の主要なプランだった。

『虹のドル』制度に変更することは、ヘロインやコカインの麻薬ボスのように不正な現金を蓄えている連中が古い通貨を新しい通貨に換えなくてはならず、多くの金が隠匿場所から出てくるということとを意味した。このことで連邦政府の赤字を減少させることになるだろう。

レーガン大統領は非公式にマルコスへ『虹のドル』を支えるため、闇の金の貯蔵分を貸してくれるよう頼んだ。いつものように、彼は金を貸すにあたり手数料をレーガンに請求することができた。マルコスにとって不幸だったのは、彼が要求した手数料がアメリカ政府が公正と考える以上に高かったことだ。

当時ホワイトハウス職員だった人物を含む我々の情報筋によると、レーガンは古い友人が自分を失望させたことを嘆いたそうだ。

昭信託について日本政府を恐喝した当時の試みを考えても、レーガンのアドバイザー、特にキャセイはマルコスはやりすぎたと唱えた。

マルコスを退陣させ、その過程で彼が貯めこんでいた多量の金塊を剥奪する時機が来ていた。

キャセイは即座に行動に移った。その後数ヶ月の間に、国民のパワーはマニラの道路にあふれ、群集はマルコスの退陣を要求した。

民衆の抗議の声が通りにあふれたとき、キャセイはリーガン財務長官、CIAのエコノミストのフランク・ヒグドン教授、弁護士ローレンス・クリーガーとともにマニラに飛んだと言われている。

マルコス側近によれば、会談の目的はフェルディナンドを説得して七万三千トンの金を譲るようにすることだった。キャセイとリーガンはマルコスに最後のチャンスを示していた。リーガンはマルコスに、米国債務証書で八〇%、現金で二〇%と引き換えに金を譲渡する署名をするよう繰り返し説得した。マルコスは終末が近いと感じながら、現金で八〇%、債務証書は二〇%だけにしよう要求した。押し問答が無駄だとはつきりした時、ヒグドン教授はマルコスに、「二週間以内」に権力の座から降ろされると通告したと言われている。実際、数週間の後、マルコスはハワイで事実上自宅軟禁状態だったのである。

同じマルコスの側近によると、大詰めでの次の動きはキャセイ、リーガン、ヒグドンとの会談数日後にあり、三者委員会の使者が、マルコスに地球開発基金に対して金塊で五百四十億ドルを提供することを求める内密の要求書を手渡した。

その場に居合わせていた我々の情報筋によると、マルコスは文体が華麗なその文書を一瞥し、軽蔑したように発送済書類入れの中に放り投げたと言うことだ。特使は急いでマカティにある三人委員会の事務所にもどり報告した。

三日後、マルコスはリーガン大統領の仲介者、ネバダ州上院議員ポール・ラグゾールトから最終提案を与えられた。その時までマル

コスはマラカニアン宮殿で事実上立てこもり状態だった。狼瘡をわずらい腎臓と肝臓が衰えた重病の男、マルコスはあきらめて米軍ヘリコプターで救出される見返りに自分の「金」を剥奪された。その晩、荷船がパシグ川を宮廷まで引かれ宮殿の地下倉庫、大統領保安部隊の敷地や宮殿に隣接したビルの地下倉庫から多量の金棒が積み込まれた。この作業は一晚中続けられ、多くの人々に目撃された。

明け方、荷を積んだ船はマニラ湾そして、最終目的地のスービック湾の海軍基地まで引かれた。その基地で金は最初に軍用品地下倉庫に保管され、その後アメリカ海軍の大型船に乗せられたと言われている。

(アメリカ政府は一九五〇年以来公式に金の在庫を監査していないので、その後金に対して何が起こったかを述べるのは難しい。ただ、アメリカ政府は八千トンの金を所有していることは認めている。)

その晩、アメリカ陸軍のヘリコプターがマラカニアン宮殿の庭を急襲し、マルコスファミリーとその取り巻きを積み込んだ。

マルコスたちが驚いたのは、マラカニアン宮殿からイルコス・ノルテにある彼らの本拠地に連れて行かれたのではなかったことである。彼らはイルコス・ノルテで自分たちの領地のための防御物を築く計画だった。彼らはハワイの軟禁所に連れて行かれた。「我々は救出されたのではなく、誘拐されたのだわ」とイメルダは嘔み付くように言った。

イメルダはホノルルに彼らが到着した時、持っていた数十億ドルの価値のある金証明書をアメリカの税関職員が押収したと言った。

税関が用意した公式リストにはその証明書は載っていないかった。その後、イメルダはアメリカ財務省が証明書を押収したことを認めた

と主張した。

しかし、専門家は証明書のすべては偽造であると決定した。我々が見てきたように、金の証明書を偽造品だと非難することは、本物であったとしても、決まりきった手順だろう。これが押収品に対して一般的に行われるやり方である。

このような事情を考えると、今もしくは将来に銀行が金持たちから預かった金証書を偽物だと告げる大きな可能性があるにも拘らず、金持ちが銀行に金を預け続けるのは不思議に思える。

そんな詐欺の気配があるなかで、財務省が押収された金の証明書に對してどうしたかを詳しく知ることは興味深いことである。

リーガン財務長官は確かに多くを語っていない。彼とCIA長官キャセイは、イラン・コントラ時に資金洗浄と銃密輸で果たした役割で不評を招き辞任せねばならなかった。

イラン・コントラ事件でキャセイが果たした役割を見れば、外国政府を操作したり、アメリカ国内の右翼民兵に資金援助をするため、日本の略奪品を不法に使った事件でも彼が任務を果たしたことは十分認識できるものだ。

マルコス家がハワイに到着したときに、彼らから金品をまきあげたり、彼らの金証明書を押収したりしたことは十分に価値のあることであつたが、多くの疑問がうやむやのままである。

はじめに、どうしてイメルダとマルコスは自分たちの闇の金を他人に管理されている銀行に移そうと主張したのか。全てを押収されたらどうするつもりだったのか？

ハワイで、ふたりは苦勞して海外に隠した金塊を引き出すことが出来ないことを理解した。腐敗し失脚した独裁者がやったように、金塊が不正に取得されたという口実で彼らの口座は封鎖された。

これがアメリカ政府の態度であつたが、アメリカは三〇年以上マ

ルコスと同盟を結んでいたのだ。スイス政府はマルコスがスイスの銀行にいくばくかの金を所有していることを簡単に否定して、より現実的な態度をとつた。世界中の銀行家たちはマルコスの口座については何も知らないと言明した。

ホノルルで彼らがもはや勘定を払うことが出来なかつた時に、フェルディナンドは旧友ドン・エンリケ・ゾベルに危機を乗り切るために二億五千万ドルの借金を頼んだ。ゾベルによると、マルコスは借金の返済能力があることを示すためにゾベルに金証明書を見せた。その証明書はアメリカ税関に押収されていなかったものだった。これらもまた後になって、アメリカ財務省によつていかさまであると宣告された。

数カ月後、ますます、むくんで黄疸症状の進んだマルコスは、自分と友人に大量のマクドナルド・バーガーとポテトフライを買いやらせた。食事のさなか、マルコスはビッグ・マックをのどを詰まらせ、ひどく咳き込んだ。翌朝、一九八九年一月一日、彼は肺の虚脱のためホノルル・セント・フランシス・メディカルセンターに入院し、同九月の彼の死まで、生命維持装置をつけたままだった。そんなふうには、アメリカ政府の歴史の中でもっとも腐敗した関係のひとつが終わつた。もしくはそのように思われた。

サンテイーは死んだ。マルコスも死んだ。一九八七年の五月にキャセイは死んだ。しかし、エンタープライズを作つた多くの民間組織の指導者たちはフィリピンの中に多くの戦争金が残っており、サンテイーの世界中の銀行口座は手つかずのままだということを知つていた。

彼らは地中から、もしくは銀行から金を回収できるかどうかを確認しようとした。どこをさがすべきか正確にはわからないので、ジョン・バーチ・ソサエティは彼らにロバート・カーティスに接近して、過去のことは本当に過去のことなのか確認するようにせかせかせた。

（訳注、マルコス政権の崩壊は我々リアルタイムで見ている。今から思えば民主化運動と言うのはこのような理由で行うのかと言う事に驚く。そして、今でもその手法は世界のあらゆるところで実施されている。きっと、そんな程度なのだろう。まさに、びつくりだ。レーガンのレインボーカラーも初耳だ。もし本当なら暗殺されかけたのもうなづけるし、成功していたら大変に良かったのに。）